

理事長 土屋 勝

石灯籠には、「皇紀二千六百年（1940年） 庚辰秋十月 柳馬場六角 上尾庄兵衛 建之」と銘が刻ま  
れており、本学愛学館前、上尾庄兵衛様 頌徳碑の  
並びに設置しています。

歴史を感じさせる大変立派な石灯籠です。ぜひ、  
皆様も一度ご覧になって下さい。

なお、上尾庄兵衛様は、大正2年（1913年）以  
来、私立京都薬学校・京都薬学専門学校を通じ30余  
年間経理の重責を担い専心母校の運営と発展に尽さ  
れた功勞者で、頌徳碑にはその功勞を称えた銘文が  
刻まれています。



私の薦める、私の一冊  Column

代謝分析学分野 教授 安井 裕之

小熊英二 著『社会を変えるには』  
講談社現代新書 (2012)

本書のタイトルだけを見れば、社会革命家の思想  
や行動が書かれている過激な内容の書籍を想像され  
る人が多いかも知れません。一方で、今の社会を変  
えたい、と何となく日頃から思っているけれども、  
実際には自分の力で変えられるとは思えない。そも  
そもどうやれば「社会を変える」ことになるのか分  
からないと心に抱いている人も多いのではないで  
しょうか。本書は、後者に当たる人たちに、「そも  
そも社会を変えるというのは、具体的にどうい  
うことか」、「現代において社会を変えるとは、具  
体的にどういふことか」を少し真面目に考えたり行  
動してみたりするためのヒントを与えてくれます。

注目すべきは、著者の小熊英二氏（慶応義塾大学  
総合政策学部 教授）が、2011年に発生した未曾有  
の東北大震災と福島原発事故の後に本書を出版して  
いる事実です。ポスト2011年の日本は、それまでの  
日本とは違う社会の方向へシフトしていく発想を広  
げることが必要なのは、と思った人が本学にも多い  
でしょう。その変化のスピードが、緩やかなのか急  
やかなのかは全く見当が付きませんが、若い世代が  
変化の必然性を考える大きなきっかけになったのは  
間違いありません。

社会を変えてみたいのなら、近代から現代にかけ  
て日本の社会が変遷してきた歴史を正確に知る事が  
まず必要です。小学校から高校までの間に日本の近

代史や現代史をじっくりと学んできた経験を持つ若  
い人がほとんどいないのですから尚更です。そし  
て、もっと知ってほしい事は、社会を構成する個々  
の単位である、自分と他者との関係性の大きな変化  
です。例えば、家庭、友達、学校、職場、地域社  
会、国家といった構成員の数が少ない集団から多い  
集団まで、現代では集団内の人間関係が根本から本  
質的に変化してきています。もはや、「私がいて、  
あなたがいる」と言った最初に個人がいてそこから  
始まる関係性ではなく、「集団の中で始めから存在  
しているのは相互関係のみで、そこに当てはまる主  
役と相手役が事後的に決まる」世の中になってきて  
います。この「個体論の発想から関係論の発想」へ  
の変化の方が、より大きなパラダイムシフトであ  
って、21世紀の国内や海外の市民社会のベースにな  
っていくでしょう。そこでは、人々がより自由にな  
って個人の選択は増大している様に見えますが、  
単に「選択肢が増えた」というより「選択できるこ  
とを意識するようになった」というのが本当のところ  
なのです。

こんな風に本書を紹介してみても手に取る人が増  
えてくれるのかは予想できませんが、7章構成の中  
で最後の第7章から読んでみるのもいいでしょう。  
そこには、皆さんが一番関心のある現代日本のこと  
が書かれています。そこから前の各章に戻って読む  
のもいいと思います。あるいは、そもそもデモクラ  
シーってなんだ、日本にはどんな風に導入された  
のか、ということに関心のある人は、そこから眺  
めてもいいでしょう。

※本書は入荷次第、図書館内の本誌推薦書コーナーに展示いたします。